

「滅びない言葉」 -マタイによる福音書講解説教 99-

詩篇 第104篇 25節～30節  
マタイによる福音書 第24章 32節～51節

説教 岡村 恒 牧師

「だから、目をさましていなさい。いつの日にあなたがたの主がこられるのか、あなたがたには、わからないからである」(42節)。主イエスの約束の言葉です。

弟子たちには、どうしても主イエスに聞きたいことがありました。世の終わりがいつ来るのか、その前兆は何か、この自分はその時、どうしたら救われるか、ということです。主イエスの答えは、弟子たちが期待した答えとは全く違うものでした。「その日、その時は、だれも知らない。天にいる御使いたちも、また子も知らない。ただ父だけが知っておられる」(36節)。

この言葉は、今、ここにいる私たちに向かって語られています。そして、私たちを励まし、慰める約束の言葉です。私たちが今過ごしているこの時は、世の終わりを待ち望む時です。これは、何の希望も残っていないような時ではありません。期待に胸を踊らせながら、目を見開いて楽しみに待つ。そういう「喜びの時」です。

「目を覚ましていなさい」、というのは、眠い目をこすりながら夜更かししなさい、という話ではありません。実際、このすぐ後で弟子たちはどうしても目を開けていることができませんでした。主イエスが、十字架での死を前にして、ゲッセマネの園でお祈りになった時の話です(マルコによる福音書 14章32節～42節)。主イエスが死ぬほどの悲しみを味わいながら祈っておられるすぐ側で、「目を覚ましていなさい」と何度言われても、弟子たちはどうしても目を覚ましていくことができませんでした。

旅に出た主人は、帰ってきた時に、眠ってしまっている門番や僕を見つけて、懲らしめたり、外に追い出すために、わざわざ突然帰って来るのでしょうか。もし、「目を覚ましていなさい」、というお言葉が、厳しい命令の言葉であるなら、私たちは今、恐怖の時間を過ごしていることとなります。自分自身の責任で目を覚まし、主人の帰りをビクビクしながら待たなければならないからです。主人の帰還は、恐るべき審判が下される「恐怖の瞬間」だということとなります。

かつてキリスト教会は、終わりの恐怖の中で必死で生きる人々であふれていました。ある修道士、マルティン・ルターという人もそうでした。しかし、聖書をむさぼるように読む中で、変わることもない神の言葉を聞き取りました。人が救われるのは、ただ神の恵みによる。ただ

信仰によって義とされる、と。

僕たちそれぞれに仕事を割り当てて出発する主人は、結局、僕たち一人一人を愛し、信頼して旅にでかけたのです。帰ってきた時に、一緒に喜びたいから、託して出かけたのです。私たち一人一人にも、神は特別な割り当てを与えておられます。しかしそれは、終わりの日に私たちを裁き、滅ぼすためではありません。神が私たちと一緒に喜びのためです。神は、喜びのために私たちを愛し抜いて下さいました。

「目を覚ましていなさい」という言葉は、その日を待ち望む私たちに奮い立たせる言葉です。私たちは、その日のために、私たちの救いのために、神が何をして下さったのかを繰り返し思い起こして歩むからです。

私たちは礼拝のたびに、『主のふたたび来たり給う日を待ち望む』と告白して歩んでいます。主イエスの最後のお働き、私たちの救いの完成について告白しています。今、この瞬間も、主イエスは生きて、私たちのために神に執り成し、私たちを迎えるために場所を用意しておられます。休みなく、働き続けておられるのです。

すべてのものが過ぎ去っても、決して変わることもない神の約束の言葉があります。神の言葉が変わらないので、私たちは終末を楽しみに待つことができます。神の約束、すなわち、「み子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得る」(ヨハネによる福音書 3章16b)という救いの約束です。他のすべてのものがくずれ去り、滅びても、ただ神の約束の言葉だけが強く立っているのです。少しも揺らぐことなく、神の約束だけが確かにそびえている。それが終わりの日、私たちが心待ちにしている日です。

ですから私たちは、終わりの日を恐怖の中で待たなくて良いのです。私たちには、今か今かと待つ喜びが与えられています。この、「終わりの日の喜び」は、私たちを変えてしまいます。もう、眠ってなどいられなくなるからです。主イエス・キリストの再臨の日、喜びの瞬間を、私たちはいつでも、今か今かとワクワクしながら待ちます。与えられた重荷を喜んで負い、一日一日主を讃美しながら、その日を待ち望みます。神に愛され、赦され、命を与えられた者として、今日も一日を、待ちわびながら過ごすのです。

(記 岡村 恒)